



2014所蔵品展「資料 深読み 一戦時下のあんなモノ/こんなモノ」

開催中 ～2015年1月10日(土)～

「ピースあいち」のメールマガジンで紹介した所蔵品の記事50点から、銃後の暮らしに関する所蔵品を18点選び、さらに「深読み」しました。展示してあるモノから話題が広がって、その時代の背景や雰囲気を理解していただければと思います。

福島原発事故、御嶽山噴火のニュースで現代の防毒マスクを見ましたが、展示品の中には、日中戦争時の防空演習で使用した「防毒マスク」もあります。現代ではあまり目にしない袋入り歯磨き粉・蚊取粉・洗髪用の粉などの「粉」、匂いの材料を上手に活かした代用メニューや節約メニューが紹介された「銃後献立カレンダー」なども展示されています。

さらに、戦時中の紙芝居『母さん部隊長』を声入りで



制作したオリジナルDVD、当時の啓蒙映画『灯火管制』のDVDも常時、放映しています。

是非、一度足をお運びください。

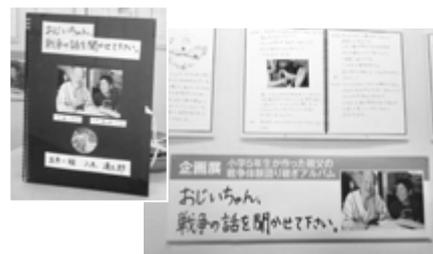
企画展『おじいちゃん、戦争の話を聞かせてください。』

～小学5年生と90歳の語り継ぎアルバム～

開催中 ～2015年1月17日(土)～

今年7月末から「ピースあいち」では初の試みで公式ツイッターをスタートしました。そうしたところ閲覧数1万ビューを超える大反響になったのが、孫が祖父のフィリピンでの戦争体験を紹介する『おじいちゃん、戦争の話を聞かせてください。』でした。これは八木湧太郎君が3年前の小学5年生のとき、祖父の進さんに聞きとりをし、写真やイラストを付けてまとめたアルバムです。8月に湧太郎君のお母さんが「ピースあいち」へ「皆さんに見てもらいたい」と持参されたもので、展示したところ来館者にも好評でした。戦争体験でも特に戦場での体験を聞く機会が

年々減っていきな、この貴重な語り継ぎアルバムの全ページを複製パネルにした展示です。



「ピースあいち」のツイッターはこちらから!
<https://twitter.com/peaceaichi/>

戦後70年 ピースあいちの企画

戦後70年を迎える来年、「ピースあいち」では多彩な展示会を計画しています。展示会を観て、戦争と平和について考えてみませんか。

- 名古屋空襲展(3月)
- 平和を紡ぐ1000人の女性 写真展(4月～5月)
- 戦後70年=今、振り返る沖縄戦と日本軍(5月～6月)
- 軍隊とは? 戦場とは? 展(7月～8月)
- 戦争の中の子どもたち展・戦争と動物たち展(10月～11月)
- 戦後70年事業展(12月～1月)
- 戦争の中の子どもたち展・戦争と動物たち展(2016年1月～2月)
- 原爆の図展(2016年3月～4月)

なお各展示会の開催は予定ですので、変更や中止になることがあります。「ピースあいち」のホームページやポスターなどでご確認ください。

「戦争の中の子どもたち」展

2015年1月13日(火)～2月28日(土)

当館設立の目的は、先の戦争によって苛酷な暮らしを強いられた記憶を風化させず、平和の尊さを市民に訴えることです。なかでも、次代を担う子どもたちに、「戦争と平和」について考えてもらう場であることを重要視しています。

2階の常設展示の解説文は低学年の子どもたちには少しむずかしいようです。そこで、このたびの企画展では、子どもたちにもわかりやすい解説文で、字数も減らしました。展示は子ども向きのモノに力点をおきました。

戦争当時の教育は、戦争遂行に協力させるためのものでした。軍国教育です。子どもたちは、「戦争をす



るのは当たり前」「兵隊になるのは当たり前」という気持ちを植えつけられました。そうした子どもたちの様相を20枚の解説パネルにまとめました。戦時、子どもたちの人気を集めたマンガ「のらくろ」や「冒険ダン吉」の本は、手に取って読めるようにしてあります。

今年も「ピースあいち年末祭」開催!

12月7日(日)午前11時～午後4時

今年最後のイベント「ピースあいち年末祭」。オープニングは、常滑市を中心に活動する「常楽」の和太鼓演奏。前庭では、餅つき。「おろし餅・きなこ餅、あんこ餅」、好きなお餅2個一皿100円で販売します。

午後は、手づくりコーナーでリースや缶バッジが作れます。リースづくりは、どんぐり、ぶな、やしあぶしなど100種類以上の木の実から選んで作ります。オリジナ



ル缶バッジづくり(1個50円)は、自分で描いたイラストや持参した写真がそのまま缶バッジになります。

1階入口では、「ピースカフェ」が開店しています。今年は、抹茶とコーヒーです。

企画展

「戦争と若者—断ち切られた命と希望」を開催しました。

この夏の企画展として7月22日から8月31日まで、「戦争と若者—断ち切られた命と希望」を開催しました。

展示は3部構成で、第1部は「きけわだつみのこえ—戦没学徒たち」です。学徒出陣により学業半ばで戦場に赴いた若き学徒たちを「わだつみのこえ記念館」所蔵資料や解説パネルで展示し、また特攻隊で戦死した朝鮮人学徒兵卓庚鉉タクキョウケンや、朝鮮人学徒を志願させるために文部省が大学に対して圧力をかけた実態を中央大学所蔵の資料で紹介しました。さらに、15歳で志願し16歳で攻撃機に乗り組んで戦死した、地元愛知一中(現在の旭丘高校)の鈴木忠熙ただひろさんについて、「ピースあいち」所蔵の遺品を展示しました。

第2部は「女学生たちの悲劇—豊川海軍工廠」で、愛知県の豊川海軍工廠への爆撃で犠牲になった女生徒たちについて、「立命館大学国際平和ミュージアム」と「豊川市桜ヶ丘ミュージアム」所蔵の遺品約30点を紹介し、豊川海軍工廠や学徒勤労動員についての解説パネルを展示しました。

第3部は「戦没画学生の絵—無言館より」で、長野県

上田市の「戦没画学生慰霊美術館 無言館」所蔵の作品から7人9作を展示し、若き画家たちのプロフィールも紹介しました。



かつての戦争では、10代の小、中学校生や高校生、大学生たちも戦争に巻き込まれて命を失いました。展示会は若者たちを襲った運命がどのようなものだったのかを示しました。参加者は、70年前の若者たちが残した遺品や遺作の前に立ち、声なき声を聞き、姿なき姿に思いを巡らせたことでしょう。

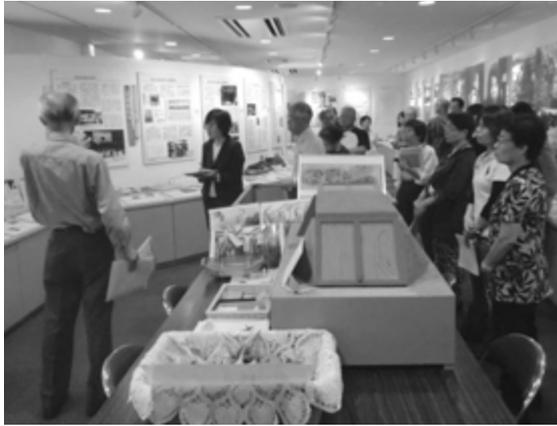
また関連企画として8月2日に講演会を開催しました。講師は上原良司研究家の亀岡敦子さんで、「特攻隊員上原良司が遺したもの」と題したお話にたくさんの方が来館されました。

毎年8月に2週間にわたって行われている「夏の戦争体験者による語り」への来館ともあいまって、企画展の入場者数は2千人近くになりました。

この企画は、一度に4館から借用した資料や作品で構成される展示会となり、借用、保管、展示、返還と苦労がありましたが、無事に終了することができました。

「展示」ガイド研修会の開催 10月5日(日)

ガイドは学校の児童生徒や大人のグループに館内の展示を説明する役ですが、展示ごとの説明時間は長く取れませんので、なかなか難しいのです。



研修会では、既にガイド登録をしている人、これからガイドをしたいという人に向けて、小中学生向け、大人向けの解説をしてもらいました。語り口はさまざまです。「さすが」と思ったのは「戦争になれば、兵士だけでなく、一般の人も巻き込まれる」とか「戦後の平和には、日本国憲法が重要な役割を果たしてきた」とかいった大事なことを、きちんと押さえて説明していたことです。「ピースあいち」の目的の一つである「戦争と平和をいかに伝えていくか」についても、展示してある詩をうまく引用して、説得力ある解説でした。

ガイドにとって大事なのは、事前に展示の内容をできるだけ深く理解しておくこと。改めてそんなことを思った研修会でした。

授業と結びつくガイドがしたい。 安井 真理子

学校から団体で来館する小、中学生たちに展示ガイドをすることは、「ピースあいち」でのやりがいのある活動の一つです。たった一度きりの、わずか1時間足らずの関わりですが、小、中学生たちが生きていく過程で戦争や平和について学び、考え、行動するきっかけになればと思いガイドをしています。

2階の展示は高校の教科書レベルのため、いかに「むずかしいことをやさしく」説明するか、また、教室とは違い自由に動ける空間で、どうすれば集中して聞いてもらえるかなど、課題はたくさんあります。先日は、寝屋川市(大阪)の小学生たちが、修学旅行で来館してく

れました。帰り際に、引率の先生から「教科書で学習したことが実感として子どもたちに伝わったようです」との言葉をいただきました。これからも授業内容と結びつくようなガイドができればと思っています。



館内ガイドへの自戒

荻野 克典

「ピースあいち」のガイドは、まだ数回ですが、とても難しいです。特に小学生のグループ。それに備え、自戒しなければと思うこと一つだけ。それは「児童に対する先生目線、子どもに対する大人目線」で案内しないように気をつけること。大人の来館者に対すると同じように、まずは言葉遣いから丁寧に対応することを心がけねばと思います。

内容についても、基本的には子どもであることを配慮しすぎず、日本が受けた戦争被害を直視すること、被害の背景には日本のアジア諸国への加害の歴史があったこと、その歴史を直視すること、その反省の中から戦後日本の平和への歩みが始まったこと。その歩み

の意味はますます大切となってきたことなどを、展示資料をたどりながら話していくようにと思っています。

物事の本質に対する子どもの理解力、吸収力は侮れないというのが、私の自戒的スタンスです。





戦争体験の語りシリーズ

「ピースあいち」恒例の夏企画、「語り手による戦争体験の話」が8月1日から15日にかけて10人の方によって行われました。8月6日は102名の方が、台風が上陸した14日は悪天候にもかかわらず、11名の方が参加され、全体で500名を超える方が体験談を聞かれました。

語り手の話の要旨を紹介します。原稿はボランティアの方がまとめたものを編集しました。

8月1日

疎開先で二つの大地震にあう

今村 實さん(81歳)

私は小学6年生の時に母の在所である安城市に疎開した。友だちと会えなくなり淋しい思いをした。そこで、東南海地震に遭った。昭和19(1944)年12月7日のお昼過ぎのことだった。昼ご飯の後、農作業をしていた。半壊、全壊の家が見られた。それから、1か月後の1月13日(1945年)の夜半、午前3時半ごろ三河地震が起きた。130戸の集落で92戸が全壊、130人が亡くなった。矢作川の河川敷で火葬にした。名古屋から集団疎開した先のお寺も倒れ、55人の児童が亡くなった。無残な光景で、寒々とした怖い思いであった。4月に名古屋に帰り、勤労働員で紡績会社に。空襲で家も焼けた。そして8月15日の終戦を迎えた。



8月6日

爆心地1.2^{キロ}で被爆

木下 富江さん(78歳)

昭和20(1945)年8月6日午前8時15分、警戒警報解除の時に読書をしていたら、突然真っ暗になり、強烈な光線と揺れ、地響きに驚き、一瞬「天皇陛下万歳」と叫んだ。(国民、特に女性は死ぬときにそう言うように教えられていた。)家は爆心地から1.2^{キロ}の所で、家屋の下敷きになった身内の人たちを掘り起こす様を見ていた。川の中に死にかかって助けを求めて叫んでいる無数の人々、お化けのような姿態の人々の姿は今でも頭に残っている。姉は被爆でできたケロイドを隠すためいつも和服を着ていた。その姉も悪性腫瘍により亡くなった。自分もいつ原爆症になるか心配はつきない。心から、「ノーマヒロシマ、ナガサキ」と訴えていきたい。



8月5日

「特攻志願」を出さず

塩澤 君夫さん(90歳)

昭和18(1943)年9月に一高を卒業し、東北大学に入学した。昭和19(1944)年10月に前橋予備士官学校に入る。本土決戦を想定した訓練を受けた。その後、千葉へ将校として配属された。その中で、「特攻志願」と書かなかったのは自分一人だけ。上官が刀を抜き、「非国民だ。命が惜しいのか。首を出せ」と迫ってきた。志願した人たちは本音ではそう思っていないのに、そうせざるを得ない雰囲気があったのだ。こんな戦争はだめだという気持ちを持っている人はたくさんいたが、表には出てこなかった。国のために死にたいと思っていないのに、本音を出せないというのが実態だった。



8月7日

豊川工場で空襲に遭う

田中 逸郎さん(84歳)

昭和20(1945)年8月7日は豊川海軍工場で空襲を受けた日である。工場では機関銃の弾丸を作っていた。8時間3交代制で、立ちっぱなしの作業であった。食事は量も少なく、イナゴの空揚げやかぼちゃの種までおかずにした。寮ではノミ・シラミで眠れなかった。戦争とは本当につらく悲しいものである。7日は朝8時頃から空襲が始まり、私は少しでも遠くへと逃げた。爆撃後、工場に戻ると、体がバラバラになって死んでいる人も見た。悲惨この上もない。戦争とは残酷で悲しいものである。国民の人権もないがしろにし、多大な惨禍をもたらす戦争は二度と起こしてはならない。



8月9日

父の沖縄戦を語り継ぐ

中村 桂子さん(61歳)

父、日比野勝廣は昭和19(1944)年8月19日、中国戦線から沖縄へ移動した。1945年4月、嘉数高地で、戦車で体当たり攻撃の命令を受ける。5月に、米軍の攻撃を受け左腕に負傷する。一緒にいた人が肉切れになりソテツの木にひっかかっていた。まわりは死体だらけ。南風原陸軍病院への移動中、お腹から赤ちゃんが飛び出て亡くなっている母子を見た。糸数アブチラガマでは破傷風がひどくなり、看護婦さんにピンセットで蛆をとってもらう。自決用の青酸カリを渡されるが、震えがあり飲むことができない。爆弾の爆風で転がり落ちたところに水があり、生き延びた。戦後も父の苦しみは続いた。何の恨みのない人をなぜ殺してしまったのだろう。自分だけが生きて悪かった。「今日はなあー」と、毎日が誰かの命日だった。「戦争は勝っても負けても悲惨だ」「命が大事! 平和を愛し戦争を起こさない努力を!」。父の思いを語り継いで行きたい。



8月10日

空襲で多くの学友を亡くす

筧 久江さん(82歳)

昭和6(1931)年生まれ。幼稚園時代に南京陥落(1937年)行列に参加した。小学校4年の時に国民学校と改称され「少国民」と呼ばれた。6年生では大東亜共栄圏について教えられ、以後、国語・音楽・歴史・修身の4科目で徹底的に軍国主義教育を受けた。昭和19(1944)年市立第三高女に入学、間もなく勤労働員で三菱電機(東大曾根)へ。翌年の1月23日の空襲では、防空壕で48人の学友が亡くなった。

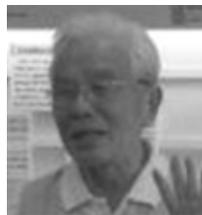


8月12日

2カ月足らず予科練に入れず

中川 礼治さん(84歳)

終戦時は15歳、愛知一中に通っていた。あの「生徒総決起集会」に参加していた。家に帰り、母に「予科練に行きたい」と言ったところ、「犬死するな」と言われ、激怒して母に向かって「非国民か!」と言ったことを覚えている。年齢が2カ月足りなく、「予科練」行きから外され、本当に悔しいと思っていた軍国少年であった。中学2年から高蔵寺の弾薬庫で高射砲の弾を作った。牛車に積んで一人で駅まで運ぶ途中、艦載機の機銃掃射に遭い、牛車の下に潜って助かった。軍隊だから昼は米の飯だが、朝や夜は土手の酸っぱい葉をかじった。サツマイモ一つで過ごせと言われた日々だった。



8月13日

疎開先の生活

北村 守男さん(79歳)

小さい頃、道で「犬とり」を目撃した。犬の口の中に針金が入られ、血が流れていた。話を聞くと、兵隊さんの防寒具に毛皮が使用されるとのことだった。小学校3年になり、三河川原町へたった一人で縁故疎開した。最初は「都会っ子!」と呼ばれ、いじめにもあったが少しずつ仲良くなった。夢は兵隊になることであった。豊橋や岡崎が空襲に遭い、真っ赤に燃えるのを見た。東南海地震や三河地震も経験した。畑に防空壕を掘るのを手伝ったり、疎開先の家族の子どもの面倒を見たりした。戦後帰った南区には何もなかった。母に聞くと「白鳥橋は死体の山だった」と。学校は校舎も教室も机や教科書も文具もなく、先生の話聞くだけであった。



8月14日

空襲は無差別攻撃だ

並木 満夫さん(91歳)

サイパン島の陥落により大型爆撃機B29の飛行が日本まで可能となったため、本土空襲が昭和20(1945)年から本格化した。3月10日の東京大空襲。アメリカ軍は下町にある町工場(中小企業)が軍需産業の生産拠点となっているためと発表しているが、下町は一般民家(木造住宅)が多数密集しており、使用された焼夷弾攻撃は、明らかに木造家屋を焼き払うこと、民間人の殺傷を目的としていた。同級生の安否を確認するため街に出ると、あちこちに死体がころがっていた。隅田川では橋桁に大勢の人が折り重なって死んでいた。戦争とは直接関係のないお年寄り、女性、子ども、病人などが犠牲になる悲惨、むごたらしいものである。特に空襲は無差別攻撃であり、人道上も問題の多い作戦である。



8月15日

物陰で泣いた

小島 鋼平さん(82歳)

戦争が始まり、南京が陥落したときに饅頭が配られた。学校で「教育勅語」が奉読されるときには、頭を下げなければならない。頭が高いと、「不忠だ」と叱られた。昭和16(1941)年には小学校が国民学校と改称、私たちは「少国民」と呼ばれ、天皇のために働くよう、勉強よりも身体を強めるようにと教えられた。昭和19(1944)年3月になると、小学3年から6年までの学童は疎開させられた。名古屋市では121校、34,000人が疎開した。私たちは、幡豆郡吉良町のお寺や神社、旅館に。その年の12月7日の「東南海地震」と20年1月13日の「三河地震」、二つの大地震に見舞われた。死者も多く民家も数多く潰れた。学童の死体は棺桶で帰名した。私たちは、物陰で泣いていた。



peace nine 2014巡回展 9月9日(火)~27日(土)

美術を通して憲法9条、戦争と平和を考え表現する「peace nine巡回展」。今年は子どもの絵の版画、名古屋芸術大学の若い学生、社会人コースの方、著名な美術家など、幅広い世代の作品が並びました。モチーフと向かい合って自分なりのイメージを作り上げていく過程が書かれたキャプションを読みながら鑑賞すると、共感したり、ハッと気付かされたりすることがありました。故水谷勇夫さんの作品『蠅と食卓』には得体の知れぬ不安を感じました。「世界が再び悪しきものに覆われはじめることに危機感を抱いて、警告を発して描いたものです。画家は亡くなくても平和を望むその思



いは作品にやどりメッセージを発し続けています」と、水谷イズルさんの添え書きがありました。“今の平和をあたりまえとせず”、そんな声が響いてくるようでした。

6年目を迎えた「語り手の会」の活動——2014年度上半期

本年6月30日、「ピースあいち語り手の会」の第6回例会が開催されました。例会では、名古屋市立大学4年生の松浦秋恵さんに、沖縄戦の体験者・比嘉俊太郎さんの体験を語り継ぐ形で報告をしていただきました。若い人の参加が会に新風を吹き込んでくれました。



本年度の語り事業も下記の3本柱の活動を中心に取り組んできました。

(1) 平和学習支援事業

県市で設置している「戦争に関する資料館調査会」からの委託による事業で、本年度は県下13校で実施することになりました。

(2) 夏の戦争体験を語るシリーズ

本年は8月1日から15日までの間に10人の語り手に



語っていただきました。広島原爆のほか、初めて東京大空襲の体験談もありました。聞き手は総勢505人に上りました。

(3) その他の語り活動

学校や各種団体からの派遣要請に応じて語り手を派遣したり、「ピースあいち」を訪れた学校の生徒たちに語る事業に取り組みました。

こうした活動を通じて上半期中、延べ31人の語り手に語っていただきました。

映像による学習会

毎月第2土曜日 午後4時半開始

参加費無料

- 6月14日 「標的の村」(2013年制作)
- 7月12日 「きけ、わだつみの声」(1950年制作)
- 8月 9日 「雲ながるる果てに」(1953年制作)
- 9月13日 「西部戦線異状なし」(1930年制作)
- 10月11日 「また逢う日まで」(1950年制作)

●スタッフから 2013年10月以降しばらく休んでいましたが、2014年早々に、一般の方から「ピースあいち」で是非「標的の村」を上映してほしいという強い要望があり、6月の沖縄関連企画として上映することになりました。沖縄の厳しい現状を多くの方に知ってほしい、見てほしいとの気持ちで、上映に必要な条件交渉をご自身がされました。参加者は80名を越え、上映会始まって以来の最高となりました。

「15歳の語り継ぐ戦争—金城学院中学生の壁新聞と平和かるた」展

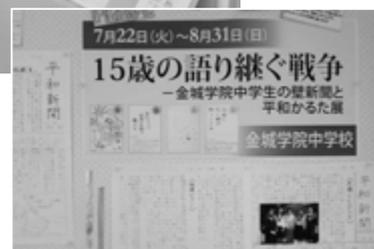
7月22日(火)～8月31日(日)

2階プチギャラリーに、今年も金城学院中学校3年生のつくった壁新聞が展示されました。広島への修学旅行で聞いた被爆体験のお話や被爆の跡を訪ねたことを一人一人が1枚の「平和新聞」にまとめたものです。平和を考えながらつくった「かるた」も展示されました。

8月15日には、この展示の前で、金城学院高校生が「核廃絶!ヒロシマ中高生による署名」を来館者に訴えました。参加した高校生は、「戦争により奪われた命への祈りと共に平和を訴え続けることが私たちの使命だと思います。私たちから世界へ発信できる平和の1ピースとし



てこの活動を胸を張って続けていきたいと思っています」と語っていました。



ピースコンサート(名古屋二期会)

9月20日(土)

夏が終わり、“小さい秋”の季節到来の土曜日の午後。“秋”と“愛”をテーマにした素敵なお歌とともに充実した半日を過ごすことができました。名古屋二期会の方々の声は、何度も「ピースあいち」でお聞きしていますが、今回はフレッシュなメンバーも参加くださり、プログラムの内容を含めてさらにグレードアップされたものでした。

会場を埋めた満員の観客を見渡したところ、普段あまり見慣れない顔もちらほらで、そんな方たちとも今後



深い繋がりが持てたらいいなと思いながら楽しみました。

えんたい 掩体壕で実体験

—「ピースあいち」三重県戦跡ツアー

10月19日(日)

秋晴れの中、38名が参加しました。三重県歴史教育者協議会会員であり、現役の小学校教員の岩脇彰さん・佐藤博子さんのご協力です。訪問先は第二次世界大戦中の軍都鈴鹿市とその周辺でした。鈴鹿市内戦跡4カ所、四日市市菰野町の戦跡2カ所です。

その中で特に印象に残ったのは、戦時中日本軍機を守るために造られた掩体壕(軍機を守るためのシェルター)であり、もう一つは四日市市菰野町にある竹永陸軍特攻飛行場指揮所でした。前者は2014年に国の登録指定文化財に指定されたもので、三重県では唯一のコンクリート製のものです。飛行機の補修のために造られたようです。後者は1944年着工



で、朝鮮人労働者も動員されたそうです。

参加者の何人かは資料館や博物館の写真、絵、文章等を見るのとは違って、現場で実物を見学するのは強く印象に残り良かったという感想を出していました。掩体壕、特攻機の訓練指揮所では壕の中に入って実体験をしました。みなさん非常に勉強になったようです。お昼には有名な「魚長」であなご丼を全員が舌鼓みし、堪能、満喫して帰りました。

資料館探訪 11

金歯・義足・髪の毛の絨毯の展示
アウシュビッツ強制収容所
(ポーランド名オシフィエンチム)

負の世界遺産で有名なアウシュビッツ強制収容所は、ポーランドのクラクフからローカルバスで1時間40分の場所に位置する。

ユダヤ人は最初、家や財産をとられ、最期にはカバン一つに入るだけの貴重品だけを持ってくるよう言われた。そのカバンもアウシュビッツ行きの貨物列車に乗る際に全て没収され、洋服、めがね、靴を回収され、最終的には髪の毛、金歯、義足まで没収され仕分けされた。これらはおびただしい量で山積みになって、再現バラックの資料室に展示されている。当時作られた髪の毛の絨毯が展示されていて、見たら吐き気がした。



大量虐殺されたガス室、人体実験や拷問を行った部屋、銃殺の跡が残る死の壁…。脱走を防ぐための電気が流れる有刺鉄線で自殺する人が後を絶たなかったそうだ。同じ境遇が自分や家族であったらと思うと涙が出る。犠牲者数は150万人だったとか400万人だったとか言われている。

アウシュビッツは入場、見学は無料でだが、中谷剛さんという政府公認ガイドが、事前予約のうえ有料でガイドしてくれる。(Y)

映画

「日本の保健婦さん
—前田黎生・95歳の旅路—

当館の2階、常設展示室の「奪われた思想の自由」というコーナーに、前田黎生さんが紹介されている。彼女は若い頃、金山の無産診療所に勤めていたとき治安維持法で検挙され、名古屋女子刑務所に3年間入獄した。戦後、名古屋市の保健婦となり、公衆衛生の第一線で働きながら、保健婦の地位向上のための全国組織を作った。今なお、ご健在である。その生涯が映画化され、来年以降小規模な上映会が全国各地で千カ所ほど予定されている。



月一回の発行で「ピースあいち」の活動がタイムリーにわかる「ピースあいち・メールマガジン(無料)」。「ピースあいち」のホームページからお申し込みください!

会員1,000名を達成!

「ピースあいち」の基本財源は、大人300円(子ども100円)の入館料と会員の皆さんの会費(正会員=6000円/賛助会員=3000円)です。「ピースあいち」開館以来数年間、正会員・賛助会員合わせて約800名で推移してきましたが、最近大きく減少してきました。基本的要因は会員の高齢化です。

この現状に危機感をいだき、私たちは昨年夏から会員拡大に取り組みました。その結果、今年10月で、正会員=347名、賛助会員=660名、合わせて1,007名となりました。ご協力、ありがとうございました。

しかし、「ピースあいち」の年間経費約1,200万円にはまだ遠く及びません。自主財源の確立は、会員の拡大です。今後とも会員の拡大につながる活動ができるよう努めていきます。どうぞ、よろしく願いいたします。

【ピースあいちの利用案内】

- 開館日 火曜日～土曜日
- 開館時間 午前11時～午後4時
- 休館日 日曜日・月曜日・年末年始
- 入館料 大人 300円 小中高生 100円
- 2階の常設展示室のほか、1階の「現代の戦争と平和」というテーマの常設展示。ほかにも準常設展示として「戦争と動物たち」「戦争と子どもたち」があります。1階には戦争に関する図書や戦争体験談のDVDライブラリーもあります。
- 学校や団体の見学で、展示ガイドや体験談を希望される場合は、事前にご相談下さい。
- 駐車場は2台分あります(300円)。他に障がい者用が1台分あります(無料)。

「ピースあいち」への交通のご案内



●編集後記●

「ピースあいち」が設立されてから7年余、この間、数多くの企画展、イベントを企画してきた。次々と企画が出されるということは、スタッフ、ボランティアが持つ人脈の幅広さだと思う。また、展示解説のボランティアや戦争体験を語る「語り継ぎ手」の公募にも幾人かが手を上げられた。心強い限りである。

当館の運動を支えている正会員と賛助会員が1,000人に達した。財政的に余裕があれば、幾つかの企画が可能となる。近年、市外・県外からの団体による見学が相次いでいる。これは当館の知名度が上がったためと推定される。まさに「継続は力なり」である。(S)